



メールマガジン 9月1日号

1 記録的猛暑が続いています。それでもやっと夜には虫の声を聞くことができるようになりました。この間、円高、株安と日本経済をとりまく情勢も一段ときびしくなっています。ところが経済が苦手な？菅内閣らしく、政治の無策は極まれり、という感じもします。「大丈夫か日本」などとはいいませんが、一層暑さが募る日々です。

## 2 活動報告

### (1) 「先生のための夏休み経済教室」盛況のうちに終了

三年目を迎える東京証券取引所との共催の「先生のための夏休み経済教室」、今年は、東京、大阪、名古屋に加えて札幌にもお邪魔して四会場、計10日間の長丁場のセミナーとなりました。参加者も名古屋62名(59名)、札幌47名(初)、東京中学177名(141名)、大阪163名(144名)、東京高校197名(148名)、とカッコ内の昨年数と比べても増加し、盛況のうちに終了することができました。

8月2日の名古屋での中学の先生対象のセミナーを皮切りに、翌3日は同じ名古屋で高校の先生対象のセミナーを実施しました。はじめての企画の「グループディスカッション」は、会場づくりや進行役、記録、発表と参加の先生方に協力いただき、充実した情報交流ができました。

次いで、4日には札幌での中学の先生対象のセミナー、5日は高校の先生対象のセミナーと続けました。札幌では、これも今年のはじめての内容の高校の先生対象で「大学入試問題の解説」の時間も加えて実施しました。具体的な入試問題を素材とした解説は、この種のもののは初めてであるという評価をいただきました。

9日、10日は東京で中学の先生対象のセミナーを実施しました。ここでは、吉川洋先生の講演が行われました。中学教科書を執筆した体験から、本来経済は難しいものでなく、中学生にとって身近な存在であることをしっかり教えたいということばが印象的でした。公民は「社会のルールブック」であり、新聞やテレビのニュースを知的に理解できるようになるのが目的だから、考え方をしっかり教えるべきという吉川先生の話は、現在の日本経済の現状を考えるヒントになるだけでなく、現場の実践への熱い期待をうかがわせるものでした。新規開発の「企業ゲーム」も、前半部分を紹介、先生方の参加で教材としての可能性を探りました。

11日、12日は大阪での中学、高校の先生対象のセミナーでした。ここでは、昨年実施できなかったゲーム教材「ブルサ」の実践や、入試問題の解説など新規企画が好評でした。講演は大竹文雄先生に、ミクロ経済学のかんどころを、教科書を読み解きながら丁寧に説明をいただきました。

最後は、お盆明けの16日、17日の東京での高校の先生対象のセミナーで、大竹先生のミクロ経済の講義、篠原代表の国際経済の講義、野間先生の入試問題の講義、東証榊原さんの講義、グループディスカッションなど充実した内容の二日間でした。

参加した先生は、教科書を使い、それを専門家が読み解き、どう活用するかをこんなに丁寧に説明してくれるセミナーはほかにはないという感想を多くいただきました。また、こんな役立つ内容だったら、出張扱いにしたいという問い合わせもきたとのことでした。

今年の成果を生かし、来年にむけ、さらに充実した内容にするために総括をしっかりとてゆくことが課題です。

講師としてお話しいただいた諸先生方、教室を運営するにあたって支援をいただいたスタッフの方々、資料提供をいただいた、清水書院、東京書籍、帝国書院の各社に感謝したいと思います。

なお、より詳細な記録は、ネットワークHPに近日中に掲載される予定です。

## (2) 全公社研の全国大会に協力

「先生のための夏休み経済教室」開催の間を縫うように、8月5日、6日に全国公民科・社会科教育研究会の全国大会が日本大学経済学部で開催されました。

ネットワークでは、8月5日に大竹副代表が講演し、翌8月6日には、「入試問題と高校教育」のシンポジウムに、ネットワークから、篠原代表をはじめとして、新井、吉田、上原の各会員がシンポジストとして参加しました。

入試シンポジウムでは、篠原代表から、ネットワークで入試問題を取り上げた趣旨が説明され、その上で、新井から昨年のプロジェクトの総括に関する解説の説明が行われました。シンポジストの吉田先生や上原先生からは、参加した感想や、昨年と今年の入試問題の違いなどが報告されました。

さらに、篠原代表からは、①リード文が難しすぎる。②問題のはやり廃りがあるようだ。環境や社会保障の問題は大事だがバランスも欲しい。③早稲田の問題は、先生方の評価が分かれたが、経済学者からは不要な知識を要求している悪問との声が多い。④青山学院の問題は、やはり評価が分かれたが、経済学者は比較的評価している。⑤国際金融の知識問題が多すぎないか。⑥歴史的な内容を問う問題が多すぎないか、と問題点が6点指摘され、すぐれた問題として、北京の入学問題が紹介されました。

質疑では、書かせる問題、論述問題をどう指導したらよいかという問いや、大学への声を届ける方法、入試に政経がもっと入ったら授業や指導の方法がどうなるかまでしっかり確認する必要があるとの意見などが出されました。

入試問題に関しては、本年 3 月のシンポジウムを踏まえて、新しい情報や今後の取り組みなどが明確に示された有意義なシンポジウムとなりました。

なお、入試シンポジウムの内容は、「日本教育新聞」8 月 23 日号に紹介されました。また、ネットワーク HP に掲載される予定です。

### 3 授業のヒント 北京の入試問題

夏のセミナーでの篠原代表の講義や入試問題のシンポジウムで取り上げられた、北京の大学入試問題を紹介します。

これは本来 4 択の試験問題だったものを、篠原代表が修正を加えたものですが、出題の内容、趣旨は変えていないとのことです。

「問題：ある人が今、7700 元のお金を中国で投資するか、それともアメリカで投資すべきかを検討している。その時、次の設問に答えよ。

- (1) 中国で 1 年間投資するとき、1 年後の元利合計はいくらになるか。ただし、中国の利率は 3% である。
- (2) アメリカで 1 年間投資すれば、1 年後に人民元でいくらもらえるか。ただし、アメリカの利率は 5%、今の為替レートは 1 ドル=7.7 元、1 年後の予想レートは 1 ドル=7.6 元である。
- (3) この人は、どちらに投資すべきか。
- (4) その結果、外国為替市場では元高ドル安が進むか、それとも元安ドル高になってゆくか、その理由を述べよ。」

解答：(1) 7,931 元 (2) 7,980 元 (3) アメリカ (4) 元安ドル高

為替の考え方、また計算力、表現力が総合的に試される総合的な応用問題といえるでしょう。なにより、知識を直接問うのではなく、日常生活に必要な知識を前提にして、手順を踏みながら、為替レートは将来の予想によって決まるという高度な内容に誘導し、最後は結果を論理的に説明させるという点ですぐれた問題です。この問題の北京の受験生の正答率は、予想に反して高かったとのことですが、はたして日本の受験生にこれを出したらどのくらいの正答率になるのでしょうか。最初の計算で躓く生徒も結構多そうな感じもします。

先生方も、定期テストなどで出題されて、日本の高校生の理解度、また、私たちの経済教育の方法の振り返りに使ってみたらいかがでしょうか。

### 4 これからの予定

(1) 9 月 3 日 (金) 本年度の第一回、第二回理事会が日本大学経済学部開催されます。決算、予算、新人事などが審議されます。

(2) 9 月 14 日 (火) コマナー UCLA 教授の講演会が東京、日本大学経済学部で開催されます。その後、東京部会が予定されています。夏の総括を行う予定です。

- (3) 9月24日(金) 京都部会が開催されます。
- (4) 9月25日(土) 大阪部会が開催されます。
- (5) 9月26日(日) 経済教育学会で、ネットワークの活動、入試プロジェクトなどを発表します。また、ネットワーク会員による個人研究発表が行われます。

## 5 編集後記 (みみずのたはこと)

夏のセミナーの最後の段階で、ぎっくり腰になってしまいました。今年二度目です。どうも腰はだめようです。いままでは安静にしていれば数日で回復したのですが、今回は長引き、病院に行って鎮痛剤と筋弛緩剤をもらってきました。さすが最近の薬はよくできているのか、半日後くらいには痛みが引き、なんとか平常の動作ができるようになりました。丁度そのとき、『腰痛はアタマで治す』という本が出たので、さっそく購入。慢性的な不良姿勢と日常動作が原因ということは、納得。パソコン作業も腰に負担をかけているなあと思わず嘆息。対策は身体の仕組みを知り、筋肉を鍛え、日常生活で自覚的に作用させよという処方箋。あれ、これって経済教育の方法と同じではないかと思う。経済の仕組みを知り、概念や理論を鍛え、現実に対応させつつ全体を改善してゆく。この本の処方箋が正しいかどうかはわかりませんが、説得力のある内容でした。ただ、私自身が、どこかの政党のように、鍛えたり、自覚的に行動したりすることができるほどのアタマが伴わないのが最大の問題です。(文責：新井明)



---

編集・発行 : 経済教育ネットワーク

(C) Network for Economic Education ◆◆